

令和元年度 医療分野国際科学技術共同研究開発推進事業
(アフリカにおける顧みられない熱帯病 (NTDs) 対策のための国際共同研究プログラム)
事後評価
課題評価委員会における評価コメント

研究開発課題名 迅速診断法の開発とリスク分析に基づいた顧みられない熱帯病対策モデルの創成
研究開発機関名 国立大学法人北海道大学
研究開発代表者名 鈴木 定彦

ハンセン病およびヒトアフリカトリパノソーマ病 (HAT) をアフリカの遠隔地等、資源が限られた環境下で簡便・迅速に診断が可能な、かつ既存技術を上回る検出効率を有する乾燥 LAMP 法と血清学的診断法を確立した。本診断法を用いて現地での疫学調査を実施したところ、保健省の予想を遙かに上回る陽性結果を取得した。相手国との緊密な連携体制による疫学調査の結果として、これまで知識・経験不足であった現地医療スタッフがハンセン病の診断方法を学び、それにより保健当局者のハンセン病に対する意識が向上したことも大きな成果と言える。また流行地域における医療従事者、一般住民のハンセン病に関する知識不足に対し National Task Force を立ち上げ、ハンセン病の啓発活動を行い、知識普及に取り組んだことも評価に値する。

HAT については、ツェツェバエや野生動物の疫学調査を実施しリスクマップを作成したこと、ハイリスク地域における感染者数の実態把握を行い、コントロールパッケージを提案したことなどザンビアでの疾病対策における立案検討にも貢献したことは高く評価される。開発された診断技術の社会実装および有効な対策パッケージの構築に向けて、医療分野、公衆衛生分野の専門家の更なるインプットを期待する。

本研究を通じてザンビア国内で人材育成が行われた事、中央政府保健省、現地医療機関、地方政府、非政府組織との連携が実施され、終了後も研究成果を維持する上で有用となる連携体制が構築されていることは本研究課題の目標を有意に達成したものとして評価されるものである。本研究で提案された診断パッケージは他の疾病にも応用が可能であり、他のアフリカ諸国への情報共有など国際的な普及が期待される。また、同診断法については WHO の事前認証を目指すと共に周辺国に広めていく際の財政的裏付けを明確化し社会実装を目指してほしい。